

東京)パラリンピックを紙芝居で学ぶ

辻健治 2016年9月25日03時00分



パラリンピックについて学ぶ紙芝居を披露する紙芝居師・かみはるさん(右)とヤムちゃんさん=渋谷区立上原小学校



内容となっている。

競技の説明に入る前に、障害について理解を深めていく。「生まれた時から手がないのかもしれないし、事故とか病気で切断したかもしれない」。女性紙芝居師のかみはるさん(27)が説明する。自身も足に障害があり、移動には杖が欠かせない。その杖を見せつつ、「お姉さんの周りにも手や足がない友達があります。みんなも普通に話してほしいな」。障害に関するクイズで盛り上げ、子どもとの距離を縮めていく。

競技の説明に入るころには、食い入るように紙芝居を見つめる子どもたち。

障害によって動ける範囲が異なることから、パラスポーツの卓球ではクラス分けがされていること。車椅子卓球では相手が手の届く範囲にサーブを打たなければいけないこと。座面のクッションの高さを調整してボールを打ち返しやすくしていること――。絵と言葉でわかりや

リオデジャネイロ・パラリンピックが幕を閉じ、熱戦の舞台は2020年の東京に移る。渋谷区は、子どもたちにパラリンピックや障害について知ってもらうため、独自に紙芝居を作り、小学校や保育園などでプロの紙芝居師が読み聞かせをする事業を始めた。

夏休みが明けて間もなく、渋谷区立上原小学校に紙芝居師がやってきた。総合学習の時間で3年生約50人に披露されたのは、パラリンピックで行う卓球をテーマにした紙芝居だ。

区が制作した紙芝居は、東京大会で区が競技会場となる卓球(東京体育館)、バドミントン、車椅子ラグビー(代々木競技場)に加え、知名度が高い車椅子バスケットボールを紹介する計4種類。日本パラリンピック委員会や各競技団体の監修を受け、渋谷のシンボル・ハチ公と少年が学ぶ

すく、違いを紹介していく。通路の段差や無造作に置かれた自転車など、障害を持つ人が街中で困る点も取り上げて、助け合う大切さを説いた。

池夏萌（なつも）さん（9）は「パラリンピックのことはあまり知らなかったなので、詳しく知ることができてよかった」。高橋眞（まな）さん（9）は「困っている人を見かけたら、手伝いたいと思った」と話していた。

区は、小学校や保育園などに出向く紙芝居を年度内に約60回実施する予定だ。（辻健治）

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.